

十字架につけられたイエシュア (1)

【聖書箇所】 マタイの福音書 27 章 32～36 節

ベレーシート

1. 裂かれし主のからだ 流されし血潮
 そは みな罪深き われらのためなり
2. 富と栄えを捨て しもべとなられた
 そは 死にてわれらの 贖いとなれり
3. いざわれらのために 開かれたまいし
 恵みのふるまいに 主を覚えて与らん

●上記は、過越の祭りの晩餐の席でイエシュアが制定された「主の食卓」(聖餐)で語られた新しい契約を歌にしたものです。イエシュアの十字架によって「裂かれしからだ」と「流されし血潮」は、「罪深き私たちのため」であったこと、そしてそれを私たちが「食べ」かつ「飲む」ことは、「主を覚えるため」です。「主を覚える」と「主を食べる」ことは一つのことです。なぜなら、「主を食べる」ことなしに、私たちが生かされることはないからです。これは奥義です。イエシュアはこう言われました。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 6 章 53～56 節

53 まことに、まことに、あなたがたに言います。

人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。

わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。

56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。

●56 節の「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります」とは、**イエシュアとひとつになること**を意味しています。イエシュアの十字架の受難は、神のみこころを実現するためになくしてはならない重要な出来事でした。たとえそれがイエシュアの周辺の人々がなしていることであっても、それらは神のシナリオの中にしっかりと取り込まれており、すべてが神のご計画どおりに運んでいきます。また一つひとつの出来事においても奥義が隠されています。その隠された奥義を今回のテキストから見たいと思います。今回のテキストを読んでみましょう。

【新改訳 2017】マタイの福音書 27 章 31～36 節

31 こうしてイエスをからかってから、マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架につけるために連れ出した。

32 兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会った。彼らはこの人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。

マタイ

- 33 ゴルゴタと呼ばれている場所、すなわち「どくろの場所」(されこうべの場所)に来ると、
- 34 彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。(詩篇 69 篇)
- 35 彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いてその衣を分けた。
- 36 それから腰を下ろし、そこでイエスを見張っていた。

●前回は、イエシュアに対するローマの兵士たちの嘲^{あざけ}りに触れました。それはイエシュアが十字架につけられた後も続いています。今回のテキストでは、イエシュアが総督の官邸から連れ出されて、ゴルゴタと呼ばれている場所でイエシュアを十字架につけたことが記されています。そのプロセスで、兵士たちがシモンという名のクレネ人にイエシュアの十字架を無理やり背負わせたこと、イエシュアに苦^{にが}みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたこと、そしてイエシュアの衣をくじで分けたことが記されています。イエシュアに関してなされたすべてのことには意味があります。たとえそれが偶然のように見えたとしても、神においては必然性があるのです。それを知るためには、私たちが「なぜ」という問いを投げかけることです。そうするならば、神の必然性が見えるようになります。その問いかけは以下のとおりです。

- (1) シモンという名のクレネ人が十字架を無理やり背負わせられたのはなぜか。
- (2) ゴルゴタと呼ばれている場所とはどこなのか。そしてそれは何を示唆しているのか。
- (3) イエシュアは苦みを混ぜたぶどう酒をなめただけで、飲もうとはされなかったのはなぜか。
- (4) ローマの兵士たちがくじを引いて、イエシュアの衣を分けたことにどんな意味が隠されているのか。

●今回は上記の四点について考えてみたいと思います。

1. シモンという名のクレネ人が十字架を無理やり背負わせられたのはなぜか

●「クレネ」は地中海に面した北アフリカの一大都市で、アレキサンドリアに並ぶ都市でした。そこに離散したユダヤ人のシモンがエルサレムの祭りに来ていたのです。ここでは「クレネ人」ではなく、「シモンという名」に焦点を当てます。「シモン」のヘブル語は「シメオン」(שמעון)です。これはイスラエル(ヤコブ)の二番目の子の名前です。新約聖書の中では、イエシュアの両親が幼子イエシュアを主にささげるためにエルサレムに連れて行った時、シメオンという老人が幼子イエシュアを見て腕に抱いて神をほめたたえました。新約聖書には彼のみならず、実に多くの「シメオン」=「シモン」(Σίμων)と名乗る人物が数多く登場します。その名前に隠されている奥義は「御子に聞く」ということです。

●「聞く」とは「聞き従う」ことです。有名な申命記の6章4節の「シエマ・イスラエル・アドナイ・エロヘーヌー・アドナイ・エハッド」は、「聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である」という意味ですが、これはイスラエルの民の重要な信仰告白です。「シエマ」は「シャーマ」(שמע)の命令形ですが、主に聞き従うことはイスラエルのあるべき本分です。それが「シメオン」(シモン)という名に象徴されているのです。いわばシメオン(シモン)という名はイスラエルのあるべき本質なのです。イエシュアの弟子の筆頭が「シモン・ペテロ」

2.1

であったということもそれを裏づけています。また、幼子イエシュアを最初に腕に抱いた老シメオンが、聖霊に満たされてイスラエルの慰め(=救い)を待ち望んでいた人物であったことも偶然ではありません。彼は幼子のうちに神の御救いを見て神をほめたたえています。その御救いは万民の前に備えられたもので、イスラエルの光栄のみならず、異邦人を照らす啓示の光として見る「新しい歌」そのものでした。そこにシメオンの名が深くかかわっているのです。

●シメオン(シモン)という名をより深く調べて行くなれば、イスラエルの全土に福音が伝えられる要所要所に必ず登場する名前であることが分かります。例えば、①エルサレムの老シメオン、②ガリラヤで召命を受けた弟子のシモン・ペテロ、③ベタニアのパリサイ人シモン、④クレネ人でイエシュアの十字架を背負ったシモン=アンテオケのニゲルと呼ばれたシメオン、⑤サマリヤの魔術師シモン、⑥ヨツパ(ヤツファ)の皮なめしのシモン、などです。

●今回の「シモンという名のクレネ人」も、無理やりではありましたが、イエシュアの十字架を背負ったことに意味があります。イエシュアが弟子たちに対してたびたび語ったことばに、以下のことばがあります。

①【新改訳 2017】マタイの福音書 16章 24節

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。

②【新改訳 2017】マタイの福音書 10章 38節

自分の十字架を負ってわたしに従って来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。

③【新改訳 2017】ルカの福音書 14章 27節

自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

●シモンという名のクレネ人が背負わされた十字架の場面は、まさにこのイエシュアのことばをそのまま絵にしたものとなっています。シモンは「無理やり」(=強制的)ではありましたが、イエシュアの後を、十字架を背負ってついて行った姿があります。ルカはこの場面をわざわざイエシュアの「後から運ばせた」(ルカ 23:26)と記しています。ここに「御子に聞き従う」というシモンの名の本質があります。しかもそのシナリオを描いたのは、他ならぬ神ご自身なのです。

2. イエシュアが十字架につけられたゴルゴタという場所

●イエシュアが十字架につけられたのは、ゴルゴタという場所であったことが記されています。ゴルゴタはイエシュアが世のすべての罪を背負って死なれた場所であり、その正確な場所を知ることは大きな意味があります。しかしそれがどこにあったのかは聖書に記されていません。当時、ゴルゴタと呼ばれる場所がどこにあったのかが周知のことであったからだと思います。

●「ゴルゴタ」はヘブル語で「ゴルゴッター」(גִּלְגֹּתַי)と表記されますが、そもそもこの語彙はヘブル語の「ひとりひとりを数える(人口調査)」という意味の「グルゴーレット」(גִּלְגֹּלֶת)に由来します。ちなみにこの「グルゴーレット」には「頭蓋骨」と「頭蓋骨を数えること」という意味もあります。そしてこのヘブル語の「グルゴーレット」がアラム語に音訳されたのが「ゴルゴタ」です。その「ゴルゴタ」はどこにあるのでしょうか。

מִקְדָּשׁ

●「ゴルゴタター」(גִּלְגֹּתָא)と同じ意味を持つ語彙に「ミフカード」(מִפְקָדָה)があります。それは「数を数えること(人口調査)」の意味の他に、「定められた場所」「一定の場所」という意味があります。聖書の中で「定められた一定の場所」とは、「罪のためのいけにえがほふられる場所のこと」を意味します。イエシュアが私たちに救うことができたのは「罪のためのいけにえの羊」としてご自身の血をささげられたからです。その罪のためのいけにえを火で焼く場所はどこでも良いわけではありません。他のいけにえは神殿の入り口や祭壇で焼かれますが、罪のためのいけにえは、必ず神殿の外の「定められた場所」でほふられ、焼かれなくてはなりません。その場所をヘブル語で「ミフカードの祭壇」と呼びます。イエシュアの時代には、神殿の東門とオリーブ山とは以下のように橋でつながっていました。



●今日多くのクリスチャンがイエシュアの足跡を辿り、エルサレム城の西側にある「ヴィア・ドロローサ」と「聖墳墓教会」を訪ねます。なぜなら、そこはイエシュアが十字架を背負って歩まれた道として、また死なれたゴルゴタとして信じているからです。プロテスタントの有識者たちはカトリックの聖地である場所ではなく、どくろのような形をした小さな山である「園の墓」という所を重視しています。しかし現在の聖墳墓教会は、東のオリーブ山とは正反対の西側の方向にあり、しかも神殿から二百メートルも離れていません。「園の墓」も同様です。ところが、エルサレムの神殿の東門からオリーブ山山頂までの距離は二千キュビトなのです。**結論から言えば、「ゴルゴタ」は「オリーブ山」にあります。**なぜなら、ゴルゴタは東側の宿営の外でなければならず、そこは神殿から「二千キュビト」(約九百メートル)以上離れた場所なくてはならないのです。当時、十字架刑を受ける極悪人をエルサレムで処刑することはできませんでした。必ず「宿営の外」で刑が執行されました。ということは、**イエシュアがエルサレムの外で死ぬのは、オリーブ山で死んだ「赤い雌牛」のように、罪のいけにえとしてでなければなりません。**

【新改訳 2017】民数記 19 章 2～5 節

- 2 「【主】が命じるおしえの定めは、こうである。イスラエルの子らに告げよ。まだくびきを負わせたことがなく、傷のない完全な、赤い雌牛をあなたのところに引いて来るようにと。
- 3 あなたがたはそれを祭司エルアザルに渡す。そして宿営の外に引き出し、彼の前で屠る。。
- 4 祭司エルアザルは指で血を取り、会見の天幕の正面に向かってこの血を七度振りまく。
- 5 その雌牛は彼の目の前で焼き、皮と肉と血を汚物とともに焼く。祭司エルアザルは指でその血を取り、会見の天幕(=後の神殿)の正面に向かってこの血を七たび振りかけよ。その雌牛は彼の目の前で焼け。その皮、肉、血をその汚物とともに焼かなければならない。

2

●オリーブ山の「定められた場所（ミフカードの祭壇）」でほふった雌牛の血を、反対側の神殿に向け、七たび振りかけ、いけにえをそこで焼きました。神殿時代でのこの位置はまさにオリーブ山であり、そこでイエシュアがメシアとして拒絶されて死なれた場所なのです。

●現在知られている「聖墳墓教会」は、ローマの皇帝コンスタンティヌスが夢でイエシュアが死なれた場所として啓示を受けたということで、彼の母ヘレナがその場所に教会を建てて現在まで続いてきています。彼は当時エルサレムの多くの信仰者の反対にもかかわらず、自分の啓示に従って「ヴィーナス神殿跡」に聖墳墓教会を建てたのです。また十字架を背負って行かれた道とされる「ヴィア・ドロローサ（悲しみの道）」も、十字軍の戦争以後に聖地巡礼者のために造られたコースでした。私たちは何ら疑うことなくそのまま信じていますが、たとえ皇帝コンスタンティヌスが自分なりの啓示を受けたとしても、このようなことは聖書的な根拠を度外視したものです(このことについては、キム・ウヒョン氏の「主の道を辿って」319～320頁を参照)。二千年近く、誰もがそのように思ってきた場所を否定することは簡単なことではありませんが、重要なのは「伝統」ではなく、聖書(神のことば)的根拠です。

3. イエシュアが苦みを混ぜたぶどう酒をなめただけで、飲もうとはされなかったのはなぜか

●マタイは「苦味を混ぜたぶどう酒」、マルコは「没薬を混ぜたぶどう酒」、ルカとヨハネは「酸いぶどう酒」とあるように、微妙に表現が異なっています。この違いを説明することは容易ではありませんが、多くの注解者は死の苦痛を和らげるぶどう酒としています。いずれにしても、マタイの強調点は、イエシュアに関するすべての出来事は預言者を通して言われた事が成就しているということに向けられています。詩篇 69 篇にはこうあります。この詩篇はメシア詩篇です。

【新改訳 2017】詩篇 69 篇 19～21 節

- 19 あなたはよくご存じです。私への嘲^{あざけ}りと恥と恥辱^{ちじよく}とを。私に敵する者はみなあなたの御前にいます。
- 20 嘲りが私の心を打ち砕き 私はひどく病んでいます。私が同情を求めてもそれはなく 慰める者たちを求めても見つけられません。
- 21 彼らは私の食べ物の代わりに毒を与え **私が渴いたときには酔を飲ませました。**※「酔」は「ホーメツ」(יָמֵץ)

●詩篇に預言されたことがイエシュアに成就しています。しかしここで問題にしたいのは、イエシュアが「苦味を混ぜたぶどう酒をなめた(=味わった=「ギユオマイ」 γεύομαι)が飲もうとはしなかった」という点です。なぜ飲もうとはしなかったのでしょうか。それは、以下の箇所に記されています。

【新改訳 2017】ヘブル人への手紙 2 章 9～15 節

- 9 ・ ・ イエスは死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠を受けられました。その死は、神の恵みによって、**すべての人のために味わられたものです。**
- 10 多くの子たちを栄光に導くために、彼らの救いの創始者を多くの苦しみを通して完全な者とされたのは、万物

27

の存在の目的であり、また原因でもある神に、ふさわしいことであったのです。

- 11 聖とする方も、聖とされる者たちも、みな一人の方から出ています。それゆえ、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥とせず、こう言われます。
- 12 「わたしは、あなたの御名を兄弟たちに語り告げ、会衆の中であなたを賛美しよう。」
- 13 また、「わたしはこの方に信頼を置く」と言い、さらに、「見よ。わたしと、神がわたしに下さった子たち」と言われます。
- 14 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、
- 15 死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。

●この箇所で記されているイエシュアの受肉の目的は、「死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するため」です。そのためには最初のアダムを終わらせるという贖罪的死が不可欠でした。と同時に、ここではイエシュアが兄弟たちの長子となるために(そのようなかわりをもたらすために)、死の苦しみをまともに味わわれたということです。そしてそれはふさわしいことであり、釣り合うだけの価値があったということです。イエシュアが経験した「死」は、永遠に一度も断たれたことのない交わりのいのちが断たれるという経験でした。私たちがその経験を理解することは不可能です。イエシュアが「死を味わった」ことによって、神がイエシュアに与えられた兄弟たちの長子となって栄光に導くという点が重要だったのです。

4. ローマの兵士たちがイエシュアの衣を分けたこと

●今日の最後の問いは、ローマの兵士たちがイエシュアの衣を分けたことにどんな意味が隠されているのかということです。詩篇 22 篇(これもメシア詩篇です)に以下のことが預言されています。

【新改訳 2017】詩篇 22 篇 16~18 節

- 16 **犬ども**が私を取り囲み 悪者どもの群れが私を取り巻いて 私の手足にかみついたからです。
- 17 私は自分の骨をみな数えることができます。彼らは目を凝らし私を見えています。
- 18 **彼らは私の衣服を分け合い 私の衣をくじ引きにします。**

●詩篇 22 篇の「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか」という冒頭の叫びだけでも、この詩篇がメシアについて預言された詩篇であることが分かります。この詩篇 22 篇はメシアの全体像を知る上できわめて重要な詩篇であり、多くの時間をかけて学ぶべき価値のある詩篇です。この詩篇には神から見捨てられた「私」(メシア)がおり、神だけでなく周囲の人々からも裏切られて、完全に見捨てられた孤立無縁の「私」(メシア)がいます。そして 16 節では「犬どもが私を取り囲み」んでいます。ユダヤ人が「犬」という言い方をするのは、「異邦人」に対してです。そのことを考えるなら、複数の「犬ども」とは「ローマの兵士たち」を預言していることになります。そしてまさに預言どおりに「彼らは私の衣服を分け合い、私の衣をくじ引きにします」ということがイエシュアにおいて成就しているのです。

マタイ

●イエシュアの衣服はどんなマントよりも霊的な力をもっています。「衣服」と訳された語彙はギリシア語では「ヒマティオン」(ἱμάτιον)の複数形です。なぜ複数なのかといえば、上着だけでなく下着も含んでいるからです。上着は分け合いましたが、一枚で織られた下着は裂くことをせじくじ引きにしたようです。マタイはそのような細かな点には関心はなく、単に「くじを引いてその衣を分けた」と記しています。「衣を分けた」ことにどんな意味が隠されているのでしょうか。それは「衣」という語彙に隠されています。

●イエシュアの衣には霊的な力があることが信じられていました。「この方の衣に触れさえすれば、私は救われる」と思っていた長血の女(マタイ 9:21)だけではなく、多くの人が「衣の房にでもさわらせてやってくださいと懇願した」ほどで、「さわった人たちはみな癒やされた」のです(マルコ 6:56)。そうしたイエシュアの衣がはぎ取られ、恥辱の限りを受けました。衣のヘブル語は「ベゲド」(בגד)ですが、その語源となる動詞「バーガド」(בגד)には「裏切る」「見捨てる」という意味があります。イエシュアはメシアとして自分の国に来られたにもかかわらず、ユダヤ人たちがイエシュアを「十字架につける」と叫び拒絶したことは、神に対する裏切り行為です。ピラトが「あの人がどんな悪いことをしたのか」と説得しようとしても聞く耳をもたず、ますます激しく「十字架につける」と叫び続けたのです。そして裁判の権限を放棄したピラトに対して、民はみな「その人の血(の責任)は私たちや私たちの子どもらの上に」とまで言ったのです。これはマタイ 21 章にある「ぶどう園と農夫」のたとえのように、神に対する裏切り以外のなにものでもありませんでした。かつ、ローマの兵士たちがイエシュアの衣を分けたことは、ユダヤ人のみならず、全人類が**神に背を向けたことを象徴する行為**を意味するのです。しかし、神の視点からすれば、メシアに対する裏切り行為も神の重要なご計画の一部なのです。神が完全に拒絶されるということこそ、それがイエシュアの受難が意味する重要なポイントです。それは「すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するため」(ローマ 3:19)であり、「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められる」(同 3:24)ためなのです。

ベアハリート

●今回は、イエシュアの十字架の受難にかかわる四つの出来事の中に、神のご計画の確かさと必然性を見てきました。聖書は実に不思議な書物です。「聖書は、わたしについて証しているもの」(ヨハネ 5:39)とか、「わたしは後のことを初めから告げ」(イザヤ 46:10)とか、時系列を全く超越して語られる啓示や預言で満ち溢れています。それもそのはず、それは聖書のシナリオが歴史を超越した神によって書かれているからにほかなりません。聖書の真のシナリオライターはマタイでもマルコでもありません。ルカでもヨハネでもなく神ご自身なのです。ですから、黙示録 21~22 章で実現することが創世記 1 章に啓示されていたとしても、なんら驚くことではないのです。むしろそうした視点で聖書を読み解くことが大切です。**神の目は常に歴史の終わりに向けられています**。そのことを知って理解することが、聖書を「食べる」ということです。神が定められた永遠のご計画とみこころ、みむねと目的を、自分の食べ物として「食べる」ことによって、美味しく、かつ甘く感じられるのです。それが甘いと感じられないのは、肉で食べ、肉で理解しようとしているからです。イエシュアは「**わたしのことばは霊であり、いのちです**」と言われました。聖書を肉で食べるなら、それは苦い食べ物となります。しかし霊で食べるなら、それは甘い食べ物となるに違いありません。

2022.1.9